優秀賞

# 気づき

賢明女子学院高等学校二年（兵庫県）
林　あかり

私が歴史の授業を受ける時、私の頭にあるのはこうだ。この頃の文化が今の日本を作ってるんやって……えっ、先生九〇〇年前やで、そんなことある。そんなこと……あるの。

この答えが茶道を通して見つかった。私は、なぜか知らない間に茶道部に入部届を出していた。今思えば、和とか伝統文化とかそんな言葉に惹かれたのだろうと思う。入部して、割り稽古が始まった。先生や先輩のさばく帛紗は魔法みたいだと思ったのをよく覚えている。茶道ってお菓子をお出しして、お茶を点てるだけだと思っていた私は、最初は何をしているのか分からなかったし、ただ淡々と教えていただいたことを必死に覚えようとしていた。お菓子がいつも違って美味しくて、それがいつも楽しみだった。そんなこんなしているうちに、私は今茶道歴約五年とこの部活の中では先輩、一応ベテランだ。五年も続ければ、部室でぼーっとできる時間が少しある。そんな時間が増え、お作法だけではなく「茶道」を考えることが増えた。なんとなく一歩を踏み入れてみた茶道に、今私は魅了されている。一つ一つの動作に美しさや相手を考える心がある。お茶碗一つにしても、形も柄も職人さんが丁寧に作り上げたもので、美しいという言葉がぴったりだ。きっとまだまだ理解しきれていない深さがあるだろう。私は茶道がすきだ。すっかり虜になった私は、祖母の家に行った時、自分の部活、茶道のことを話した。祖母は癌で、信じたくないがもう長くない。そんな私の祖母は私に、どこにあったのだろうか、祖母の嫁入り道具の大きな木の箱をプレゼントしてくれた。そこには、茶道の道具一式が綺麗に並べられていた。祖母が茶道をしていたなんてその時初めて知った。私はきっとこれをもらうために茶道部に導かれたのだとその時思った。こうやって、受け継がれていくのだと思った。

気がついた。こうやって人が人を受け継いでいくんだと。そんな単純で当たり前のことに気がつかなかった歴史の授業を受けていた私。人が歴史を紡いでいるのだと。そして未来を紡いでいくのは私だと。もう一つの茶道の美しさはここにあるのではないだろうか。